

岡山県倉敷市真備町  
勝負砂古墳第6次調査  
概要報告



2006

岡山大学考古学研究室

## 勝負砂古墳第6次調査概要報告

### 目次

はじめに	松木武彦(1)
調査の経過	森 仁優(1)
1 調査の成果	
1. 前方部Dトレンチ	中原香織(3)
2. くびれ北トレンチ	藤原摩耶・川島誠次(5)
3. 後円部東トレンチ	箱田一紗(9)
2 遺物	
1. 埴輪	大智恵理子(11)
2. 須恵器	野上香緒里(12)
3. 他の時代遺物	
a. 石器	箱田一紗(12)
b. 土器(古墳時代以降)	中原香織(13)
結語	松木武彦(15)

### 挿図

第1図 勝負砂古墳トレンチ配置図	第7図 埴輪実測図
第2図 墳丘断面模式図	第8図 須恵器実測図
第3図 墳丘構築過程模式図	第9図 石器実測図
第4図 くびれ北1トレンチ土層断面図	第10図 土器実測図
第5図 くびれ北2トレンチ土層断面図・平面図	第11図 勝負砂古墳周溝想定図
第6図 後円部東トレンチ土層断面図	

### 図版

1 a 前方部Dトレンチ(後円部)	4 a くびれ北2トレンチ(周溝側から)
b 前方部Dトレンチ(前方部)	b くびれ北2トレンチ(墳丘側から)
2 a 前方部Dトレンチ主軸断面1	c くびれ北2トレンチ土層断面
b 前方部Dトレンチ主軸断面2	5 a 後円部東トレンチ(周溝側から)
c 旧表土を用いた盛土	b 後円部東トレンチ(墳丘側から)
3 a くびれ北1トレンチ(墳丘側から)	
b くびれ北1トレンチ土層断面1	
c くびれ北1トレンチ土層断面2	

## はじめに

岡山大学考古学研究室では、1998年度以来、吉備地域における「雄略朝」期の歴史的動態を解明する目的で、5世紀後半から6世紀初頭の古墳を対象に、データの集成や測量・発掘調査に取り組んできた。とくにこの時期の有力古墳が濃密に分布する倉敷市（旧貞備町）二万地域を主たるフィールドに選び、これまでに天狗山古墳、および「雄略朝」期以後の実態を反映する二万大塚古墳の発掘調査を行った。勝負砂古墳は、両古墳の間に位置する首長墓の可能性のあるものとして注目してきたもので、2001年から予備的な調査も含めて5回の調査を行ってきた。これまでのおもな成果は、周溝の可能性のある溝状遺構を発見したこと、後円部の深い位置に埋葬施設らしき構造が存在する可能性をつかんだこと、後円部の盛土構築技法の一端を明らかにしたことなどである。今回の第6次発掘調査は、いまだに未確定であった墳形を最終的に確定する目的で、墳丘裾および後円部と推定前方部との境界部分を重点的に精査した。

## 調査の経過

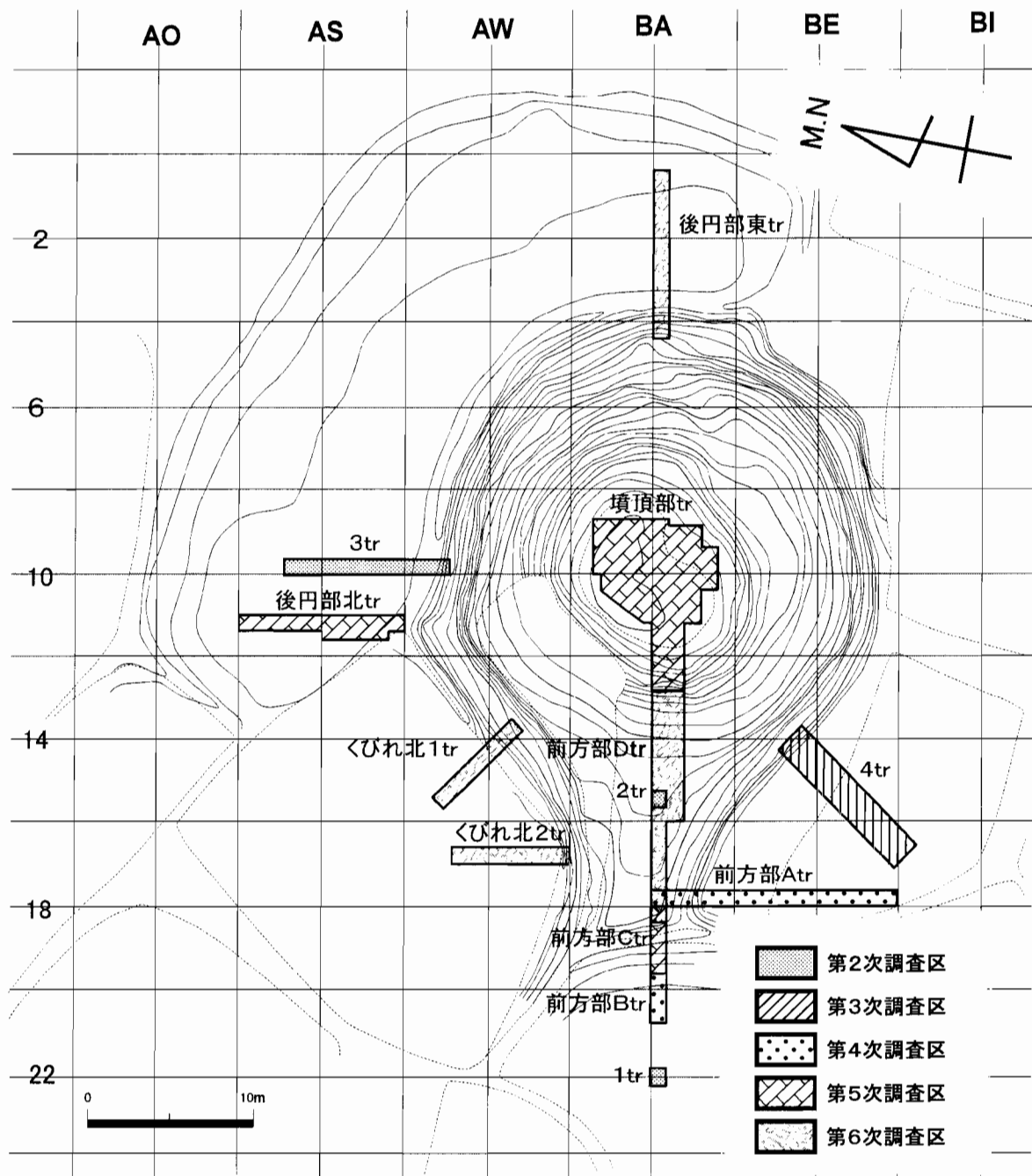
調査は3月6日から3月29日までの期間、岡山大学考古学研究室が主体となって行った。今年度の調査は、墳丘構築方法、墳丘形態の把握、外表施設の有無の確認を目的とし、前方部、くびれ部北側墳裾、後円部東側墳裾に調査区を設定した。

前方部Dトレンチは、昨年度までの墳頂部トレンチと第4次調査の前方部Aトレンチ間に設定して調査を行い、遺構面を検出した後に墳丘主軸沿いにタチワリを入れ、地山を確認した。調査の結果、墳丘面は概ね原形を留めており、後円部から前方部にかけての墳丘構築方法について明らかにすることができた。また、葺石や埴輪列などの外表施設は検出されなかった。なお調査開始時に第2次調査の第2トレンチ、19日に第4次調査の前方部Aトレンチ、及びCトレンチの一部を再検討している。調査終了後、タチワリ内の一部を上巻で保護して埋め戻しを行った。

くびれ北トレンチでは、2つの調査区を設け調査を行った。調査の結果、両トレンチで第2次調査第2トレンチ、第5次調査後円部北トレンチで検出されたものと一連と考えられる周溝状遺構を検出している。調査区内では本遺構の全体を把握することができなかったが、墳丘に沿う形で巡ることが確認でき、墳形確認の手がかりとなる情報を得られた。また、第1トレンチの周溝状遺構の落ち際には、後世の集石遺構を検出している。墳丘部分に関しては、地山まで掘り下げを行ったが、後世の改変もあり、墳丘面を確認することはできなかった。その後、第1・第2トレンチ共にタチワリを入れ、地山を確認した後、埋め戻しを行った。

後円部東トレンチでは、掘り下げの結果、くびれ北トレンチ同様、第2次調査第3トレンチ・第5次調査後円部北トレンチで検出されたものと一連と考えられる周溝状遺構を検出した。その後、調査区北側にタチワリを入れ、地山を確認している。また、周溝状遺構の底面からピットを2基検出している。墳丘部分に関しては、遺構面を検出した後、北側にタチワリを入れて基盤層まで掘り下げたが、調査範囲が狭く、後世の改変も激しいため墳丘面の確定、及び墳丘構造を把握することはできなかった。また、葺石や埴輪列などの外表施設は検出されなかった。調査終了後、埋め戻しを行った。

今年度は、3月19日に現地説明会を行った。また、昨年度同様インターネットを通じて調査の経過およびその成果を随時紹介し、資料の公開を行っている。



第1図 勝負砂古墳トレンチ配置図 (S=1/400)

第6次調査参加者 (学年と所属は調査当時)

- |         |       |                  |           |       |       |      |      |
|---------|-------|------------------|-----------|-------|-------|------|------|
| 1年      | 大川晃正  | 景山佐保子            | 下竹英吉      | 徳富孔一  | 藤井裕也  | 細川明子 | 水野蛭  |
|         | 山中慶子  | 横江夏              |           |       |       |      |      |
| 2年      | 大當雅美  | 大智恵理子            | 川島誠次      | 中原香織  | 野上香緒里 | 箱田一紗 | 藤原摩耶 |
| 3年      | 秋山奈美  | 大石恵子             | 笹栗拓       | 水島庸一郎 | 森仁優   | 森井敦子 | 山梨千晶 |
| 4年      | 片山健太郎 | 三好元樹             | (大阪大学文学部) |       |       |      |      |
| 院生 (修士) | 石坂泰士  | サウセド・瀬上・ダニエル・ダンテ | 山口雄治      |       |       |      |      |

# 1 調査の成果

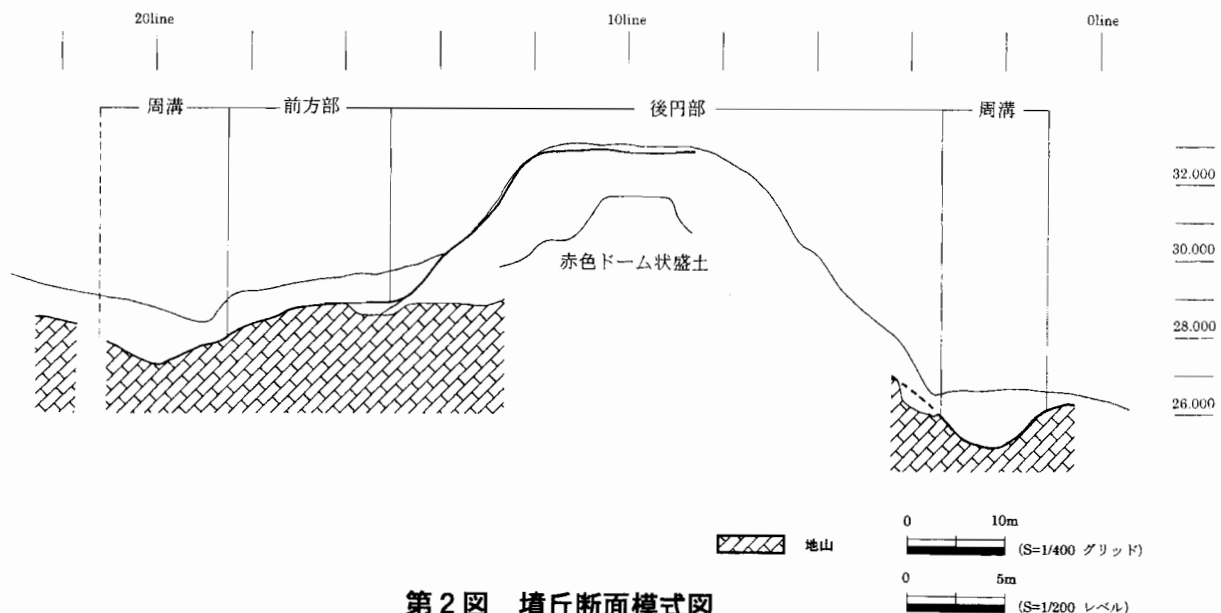
## 1. 前方部Dトレンチ [第2・3図、図版1・2]

本調査区では墳形の確認と墳丘の構造の解明を目的として、BAライン沿いに15ラインから50cm西の地点から1m幅で西へ6m、2m幅で東へ6mのトレンチを設定した。その際、2トレンチにあたる部分は埋土を除去し、セクションの再検討をおこなった。その後、15ラインから50cm西の地点から西へ2mの範囲を2m幅に拡張した。さらに18ラインから50cm西の地点まで拡張し、Aトレンチ内埋土及びCトレンチ内埋土を除去し、セクションの再検討をおこなった。

調査の結果、15ラインから西側において標高28.8m付近で平坦面をもつ前方部が確認されている。16ラインから西側の平坦面は地山を削り出して作られている。この前方部については、後円部から前方部にかけての盛土が改変を受けておらず、前方部の上面へなだらかにつながるため、前方部は概ね原形を留めていると考えられる。また第5次調査の前方部Cトレンチで検出されたものと一連である可能性の高い盛土が18ラインから西側で検出されたが、後世の削平を受けているため墳端に関する確実な情報は得られなかった。しかし第4次調査の前方部Bトレンチで検出された溝状遺構が墳端を画する周溝であるとすれば、墳端は20ライン付近にあったと推定される。以上のことから本古墳は低平で短い前方部をもつ帆立貝形前方後円墳と考えられる(第2図)。

今回の調査によって後円部から前方部にかけての構築過程が明らかになった。まず地山の整地を行い、標高28.8m付近でほぼ水平にしている。この段階で前方部と後円部の境にあたる部分にくぼみが形成されるが、このくぼみの性格については不明である(第3図-②)。次に地山の整地の際に剥ぎとったと考えられる表土を墳丘の比較的内側に積んでいる(第3図-③)。その後、厚さ0.25m前後の褐色の盛土、0.85m前後の橙色の盛土、橙色と褐色の混ざった盛土を順に施している(第3図-④)。これらの盛土は基本的に外側に高まりを作り、その内側に土を盛り、平坦にする工程を繰り返して作られている。地山を整地した際に形成されたくぼみの部分に関しては、後円部側の盛土の上から、前方部の平坦面に合わせるように盛土を施している(第3図-⑤)。

出土遺物としては、後円部から前方部にかけて堆積した流土と考えられる層から埴輪片が出土しており、本古墳に由来するものである可能性が高い。なお今回の調査では埴輪列や葺石などの外表施設は検出されなかった。また、前方部上に堆積した層からは中世から近世にかけての陶磁器片などが出土しており、中世以降の継続的な土地利用が想定される。



第2図 墳丘断面模式図

①旧地表面



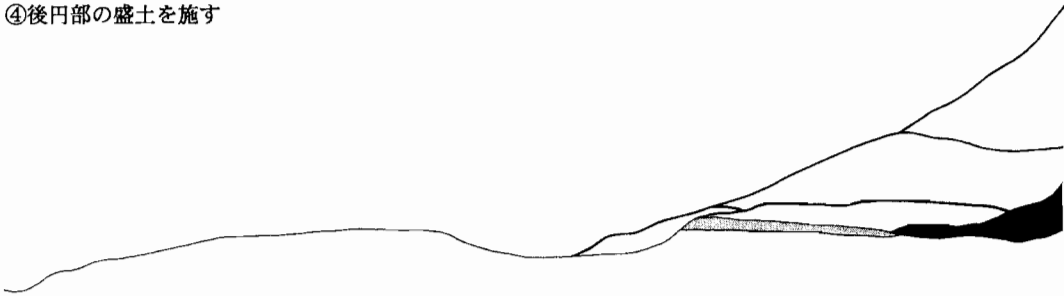
②地山の整地



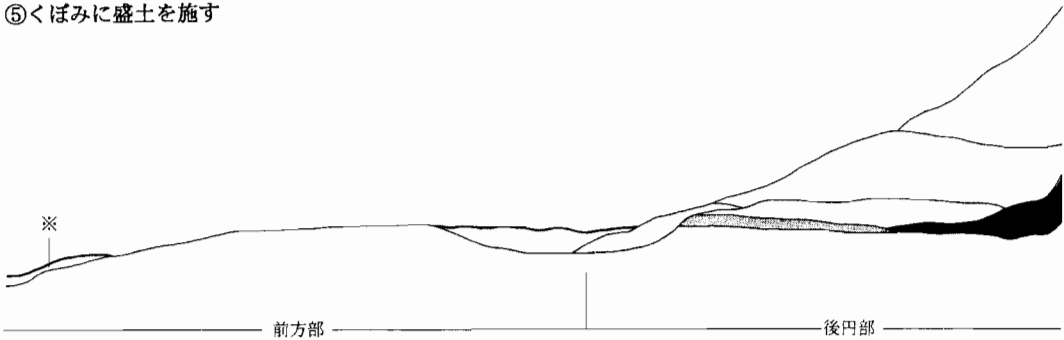
③旧表土を盛土として用いる



④後円部の盛土を施す




⑤くぼみに盛土を施す



凡例

※ この盛土がどの段階で施されたのかは不明

 旧表土

 剥ぎ取った表土

第3図 填丘構築過程模式図

## 2. くびれ北トレンチ [第4・5図、図版3・4]

本調査区は、墳形の把握と、昨年度までの調査で検出されている周溝状遺構が古墳に伴うものかどうかを確認することを目的として、2つの調査区を設け調査を行なった。

第1トレンチは、AW13とAX14を結ぶライン上に幅1.0m、北西方向へ6.5mの調査区を設定した。

調査の結果、調査区の墳丘側から3.5m付近で周溝状遺構を検出した。本調査区内で周溝状遺構の全体を把握することはできなかったが、この周溝状遺構は地山を掘り込んで形成されており、深さは最深部で約0.8m、断面形態は緩やかな弧状を描くと考えられる(第4図)。それらの特徴は、第2次調査第3トレンチ、第5次調査後円部北トレンチで確認されている周溝状遺構と共通するものであり、本遺構はそれらと一連のものであると考えられる。

周溝状遺構の落ち際付近では、集石遺構が検出された。この集石遺構の性格は不明であるが、22層からの掘り込みが確認でき、その掘り込みは基盤層にまで達する。この遺構が形成された時期は、集石に含まれていた須恵器片から判断すると古代以降と考えられる。このことから、この周溝状遺構が後世の改変をうけている可能性が高い。また、現墳裾では計3回の後世の掘削が認められ、本来の墳裾が削り込まれて改変されていることを確認した。この後世の掘削によって、当初の目的であった周溝状遺構と墳丘との関係を把握することはできなかった。

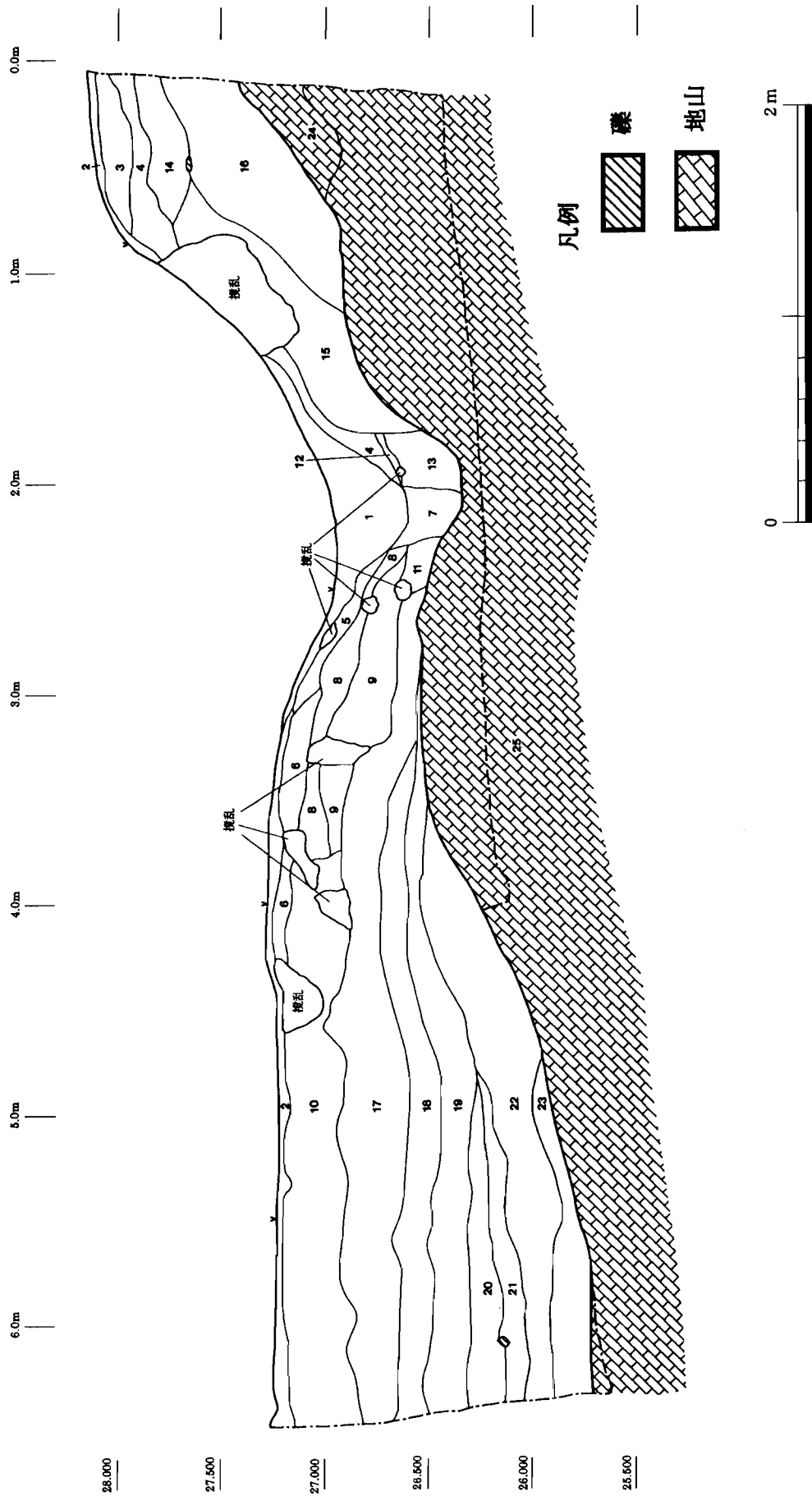
周溝状遺構内からは、埴輪片2点、須恵器片3点、土器片7点が出土している。また、周溝状遺構外からの出土遺物として、埴輪片28点、須恵器片2点、土器片9点、瓦片1点、陶磁器片3点などがある。

第2トレンチは、AY16ラインから西に1.5mの地点から、AYライン沿いに幅1.0m、北へ7mの調査区を設定した。

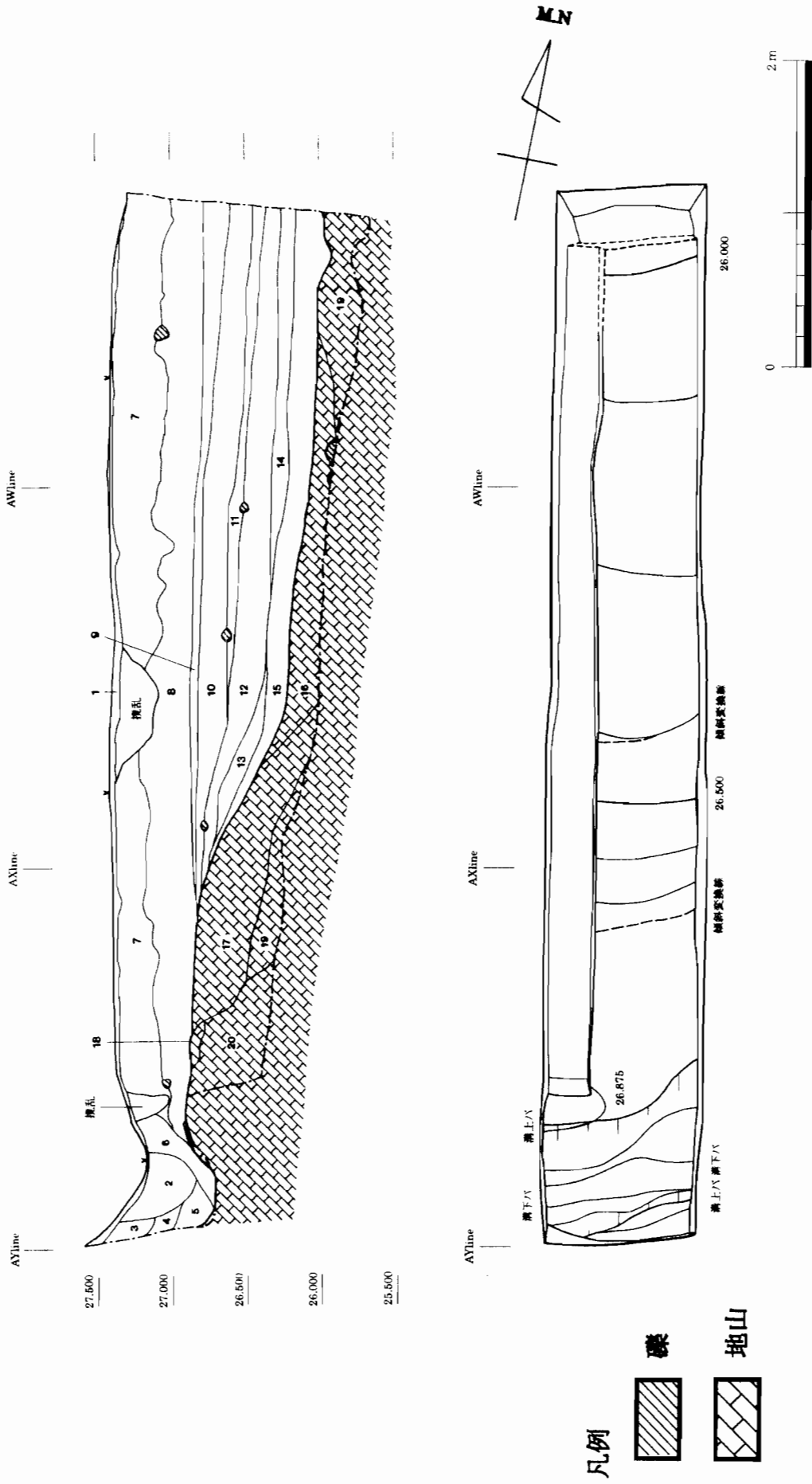
調査の結果、本調査区においても周溝状遺構を検出した。今回の調査では周溝状遺構の全体を把握することはできなかったが、この周溝状遺構は地山を掘り込んで形成されており、周溝状遺構の深さは最深部で約0.8mで断面形態は緩やかな弧状を描くと考えられる(第5図)。それらの特徴は、くびれ部北第1トレンチおよび第2次調査第3トレンチ、第5次調査後円部北トレンチで確認されている周溝状遺構と共通するものであり、本遺構はそれらと一連であると考えられる。またこの周溝状遺構は、前方部と考えていた突出部に沿う形で走ることが確認され、突出部が前方部である可能性が高くなった。

墳丘側ではAYラインから北へ約0.5mの幅で計2回の後世の掘削を確認した。また本調査区の南壁で確認されたのは流土のみで前方部斜面の墳丘面を確認することができなかったため、周溝状遺構と墳丘との関係を把握することはできなかった。表土から約0.6mの厚さで耕作土が堆積しており、耕作土の底面がほぼ一定の標高であることから、周溝状遺構の墳丘側の肩が削平されている可能性がある。

周溝状遺構内からは、埴輪片28点、須恵器片9点、土器片2点および中世に属すると考えられる甍片1点が出土している。また、周溝状遺構外からの出土遺物として、埴輪片26点、須恵器片6点、土器片23点、瓦片1点、陶磁器片10点などがある。



第4図 くびれ北1トレンチ土層断面図 (S=1/30)



第5図 くびれ北2トレンチ土層断面図・平面図 (S=1/40)

表1 くびれ北1トレンチ土層註記

層番号	層名	属性	しまり	粘性	備考
1	灰混じり暗褐色土層	堆積土	非常に弱い	強い	ビニール片を含む。
2	表土層		非常に弱い	非常に弱い	0.1~1cm程度の白・青灰の礫をまばらに含む。
3	礫混じり暗黄褐色土層	流土	弱い	弱い	3~10cm程度の礫を多く含む。
4	黄褐色土層	流土	やや弱い	やや弱い	1~5cm程度の白・灰白の礫をまれに含む。
5	明赤褐色混じり黄褐色土層	堆積土	非常に強い	やや弱い	1~3mm程度の白・青灰・黄の礫を多く含む。
6	暗褐色混じり暗褐色土層	耕作土	弱い	弱い	1~5mm程度の白・黄・赤の礫を多く含む。
7	明赤褐色混じり暗褐色土層	堆積土	強い	強い	1~5mm程度の黄・赤・青の礫を多く含む。
8	明赤褐色混じり暗黄褐色土層	堆積土	強い	強い	0.2~1.0cm程度の白・黄・青の礫を多く含む。
9	灰色混じり黄褐色土層	堆積土	やや弱い	やや弱い	0.1~1cm程度の白・黄・青の礫を多く含む。
10	黄褐色混じり暗褐色土層	耕作土	やや弱い	やや弱い	1~5mm程度の白・黄・青の礫をまばらに含む。
11	明赤褐色混じり暗黄褐色土層	堆積土	非常に強い	強い	1mm程度の白・青の礫をまばらに含む。
12	明黄褐色土層	堆積土	非常に弱い	非常に弱い	1~5mm程度の白の礫をまれに含む。
13	明赤褐色混じり褐色土層	堆積土	やや弱い	やや弱い	1~5mm程度の白・黄・青の礫をまばらに含む。
14	黄褐色土層	流土	やや弱い	弱い	0.1~1cm程度の白・赤・黄・青の礫をまばらに含む。
15	礫混じり明黄褐色土層	客土	弱い	弱い	1~8mm程度の白・青灰・赤・黄の礫を多く含む。
16	褐色土層	流土	やや弱い	弱い	0.1~1.5cm程度の白・青灰・赤・黄・青の礫を多く含む。
17	礫混じり黄褐色土層	耕作土	やや強い	やや弱い	0.1~8cm程度の白・黄・赤の礫を多く含む。
18	明黄褐色土層	耕作土	やや強い	やや強い	0.1~1cm程度の白・赤・青の礫を多く含む。
19	暗褐色土層	流土	強い	強い	0.5~2cm程度の白・黄・赤・青の礫を多く含む。第2トレンチ10層に対応。
20	褐色土層	流土	強い	強い	1~5mm程度の白・黄の礫をまれに含む。第2トレンチ11層に対応。
21	暗黄褐色土層	流土	やや弱い	やや強い	1~3cm程度の礫をまばらに含む。第2トレンチ12層に対応。
22	暗黄褐色土層	流土	非常に強い	非常に強い	0.1~2cm程度の白・黄・青の礫をまれに含む。第2トレンチ15層に対応。
23	暗黄褐色土層	流土	強い	強い	1~3mm程度の白・黄・青の礫をまれに含む。
24	暗褐色混じり褐色土層	地山風化層	やや弱い	やや弱い	1~3cm程度の白のクサレ礫をまばらに含む。
25	明赤褐色土層	地山	非常に強い	やや強い	1~5cm程度の白・青灰・黄・黒のクサレ礫を多く含む。

表2 くびれ北2トレンチ土層註記

層番号	層名	属性	しまり	粘性	備考
1	表土層		非常に弱い		礫をほとんど含まない
2	褐色混じり暗褐色土層	流土	弱い	非常に弱い	1cm程度の礫をごく稀に含む
3	橙黄色混じり暗褐色土層	流土	非常に弱い	非常に弱い	1mm程度の白色の礫を稀に含む
4	褐色混じり褐色土層	流土	弱い	弱い	1cm程度の白色の礫をまばらに含む
5	暗黄褐色土層	流土	やや弱い	やや弱い	1~2mmの白色の礫を多く含む
6	暗褐色土層	流土	やや弱い	弱い	1mm程度の礫をごく稀に含む
7	褐色土層	耕作土	弱い	非常に弱い	2~3mmの礫を稀に含む。1~2mmの白色の礫を多く含む
8	暗黄褐色土層	耕作土	やや弱い	弱い	1mmから3cmの白色、黄色、黒色の礫をまばらに含む
9	橙褐色土層	耕作土	やや弱い	やや弱い	1~2mmの白色の礫をごく稀に含む
10	暗褐色土層	流土	やや弱い	弱い	1~2cmの礫を稀に含む。2~3mmの黄色のクサレ礫をまばらに含む。第1トレンチ第19層に対応
11	褐色混じり橙褐色土層	流土	やや弱い	やや弱い	1cm程度の白色の礫を稀に含む。第1トレンチ第20層に対応
12	暗褐色土層	流土	強い	やや弱い	2~3mmの礫をごく稀に含む。第1トレンチ第21層に対応
13	黄褐色土層	流土	やや強い	強い	2~3mmの白色、黒色の礫をごく稀に含む
14	黒褐色土層	流土	強い	強い	1cm程度の黄色、黒色の礫をごく稀に含む
15	暗黄褐色土層	流土	やや強い	強い	2~3mmのクサレ礫をごく稀に含む。第1トレンチ第22層に対応
16	褐色混じり赤褐色土層	地山	非常に強い	強い	5cm程度の礫をごく稀に含む
17	赤褐色土層	地山	非常に強い	やや強い	礫をほとんど含まない
18	褐色混じり黄褐色土層	基盤層	非常に強い	強い	1cm程度の白色の礫を稀に含む
19	褐色混じり黄褐色土層	基盤層	非常に強い	非常に強い	3~5cm程度のクサレ礫を密に含む
20	礫混じり黄褐色土層	基盤層	非常に強い	非常に強い	3~5cm程度のクサレ礫を密に含む

### 3. 後円部東トレンチ [第6図、図版5]

本調査区は昨年度までの調査で検出された周溝状遺構の有無と形状の把握、その性格の解明、および墳丘から周溝状遺構にかけての構造の把握を目的としている。調査範囲は墳丘主軸沿いに南に1m、0ラインから西へ1mの地点から墳丘側へ10mである。

調査の結果、現存幅約6m、深さ約1mの周溝状遺構が検出された。周溝状遺構は東側の端部を後世に攪乱されているが、おおむね旧状を保っている。この周溝状遺構は、第2次調査第3トレンチ、第5次調査後円部北トレンチで確認されたものとほぼ同規模である。また、土層がレンズ状に水平に堆積している点や、その断面形態においても過去の調査で検出されたものと類似している。以上のことから、これらの周溝状遺構が一連のものであり、後円部に沿う形で墳丘を巡る可能性が高くなった。周溝状遺構内では、初期の流土と考えられる15層から17層において、ほぼ完形の石匙や時期不明の土器片などが出土している。10層から14層にかけての周溝状遺構の埋土からは時期不明の土器片などが出土している。また9層より上層では陶磁器片、鉄片、須恵器片などが出土しており、近世後半以降の堆積であると考えられる。その他の遺構としては、周溝状遺構の底面からピットが2基検出された。

墳丘から周溝状遺構にかけての構造については、墳丘裾部が後世に攪乱されていたため明確な情報を得ることはできなかった。後世の攪乱は土層の堆積状況から判断すると、少なくとも三回は行われていることがわかる。調査区西端で確認された遺物を含まない⑮層は、しまりが強く、盛土の可能性が考えられる。また、⑯層は前方部Dトレンチで確認された土層との比較から旧表土の可能性も考えられる。しかし、検出された範囲が狭く、それ以东では後世の攪乱によって完全に基盤層まで削平されていたため、これらの層の性格について断定することはできない。また、この攪乱土中には多量の礫が含まれていた。三回目に行われた攪乱は、墳丘側と周溝側の境にみられ、その埋土中よりビニール片が出土していることから現代に行われたと考えられる。

墳端は、傾斜変換点から、調査区西端から東へ約3.75mの位置としている。墳丘裾部は地山面を掘り込むことによって形成され、墳端の標高は25.25mである。



## 2 遺物

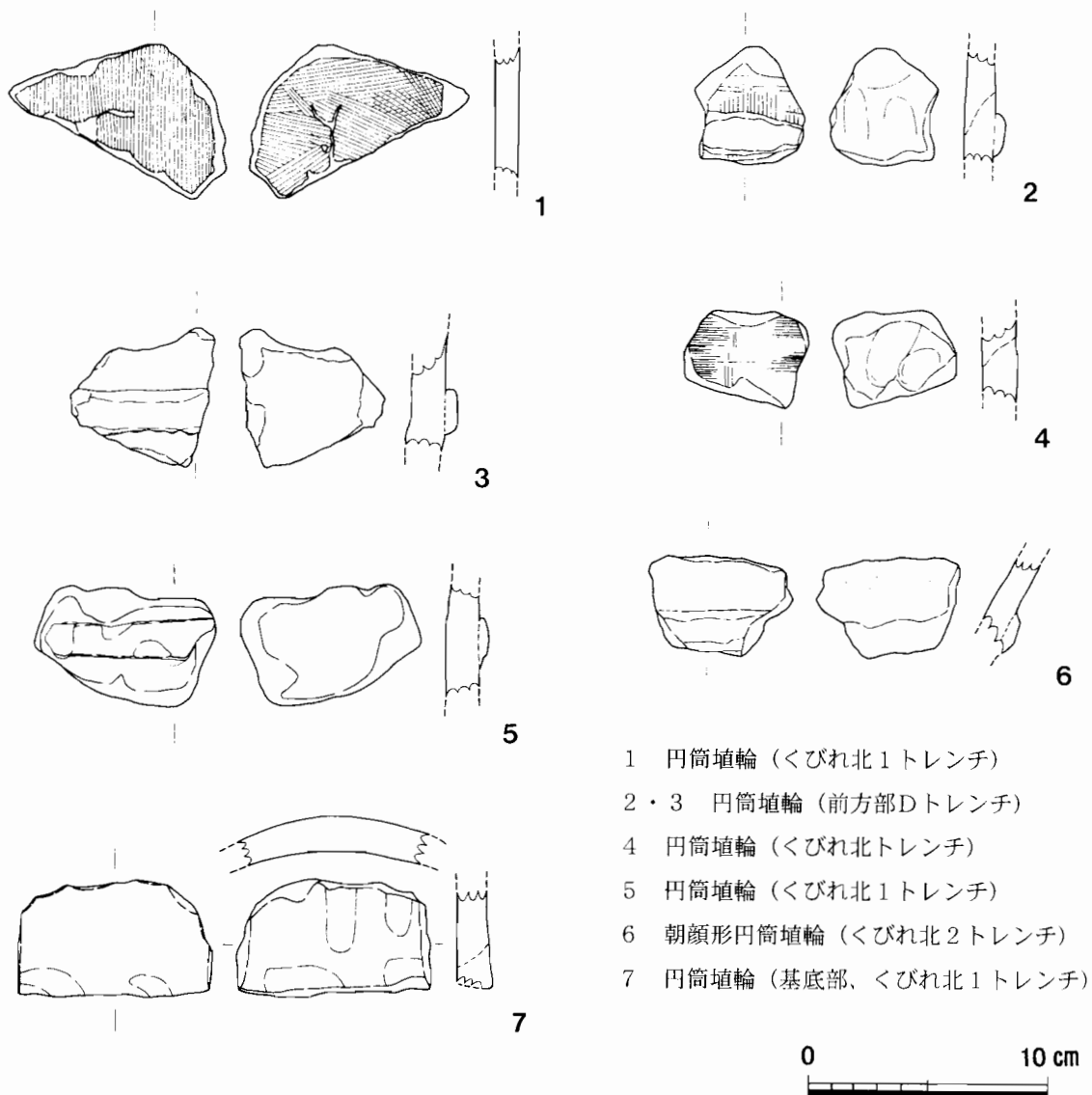
### 1. 埴輪 [第7図]

今回の調査では、前方部Dトレンチで47点、くびれ北トレンチで108点、後円部東トレンチで3点の埴輪片が出土している。いずれも小片で全形を窺いうる資料はない。現在のところ、円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪が確認でき、大部分が円筒埴輪である。このうち7点を図化した。

円筒埴輪の外面調整は、一次調整タテハケ、二次調整ヨコハケを施したのが見られる。内面調整はヨコハケ、ナナメハケ、指によるナデが見られる。突帯の断面は台形のものが見られ、いわゆる「押圧技法」のものもある(2、5)。基底部分は底部調整の可能性があるものがある(7)。器壁は基底部分で1.5cm、筒部で1.0~1.5cmをはかり、全体的に薄手である。焼成はあまいものから良好なものまであり、須恵質のものも含まれる。黒斑は確認できず、窖窯焼成と考えられる。

今回出土の埴輪は、これまでに出土している埴輪と同様に、二次調整ヨコハケを特徴とする川西編年Ⅳ期の特徴と、底部調整を特徴とする川西編年Ⅴ期の特徴の両方を示していることがわかった。以上のことから埴輪の時期については、5世紀後半前後と考えられる。

【参考文献】 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64・2 日本考古学会



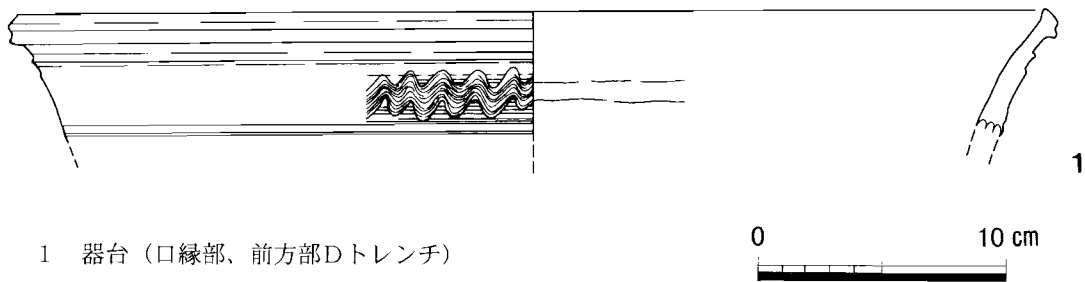
第7図 埴輪実測図 (S=1/3)

## 2. 須恵器 [第8図]

今回の調査で確認された須恵器のうち、本古墳に伴う可能性が高いと考えられるものは前方部Dトレンチから出土した1点のみである。1は器台の口縁部であり、復元口径は40.6 cmを測る。また、外面にカキメ調整の後、波状文を施す。時期は陶邑編年 TK23 型式に併行すると考えられる。

【参考文献】 田辺昭三 1966『陶邑古窯址群 I』平安学園考古学クラブ

中村浩 2001『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版社



1 器台（口縁部、前方部Dトレンチ）

第8図 須恵器実測図 (S=1/3)

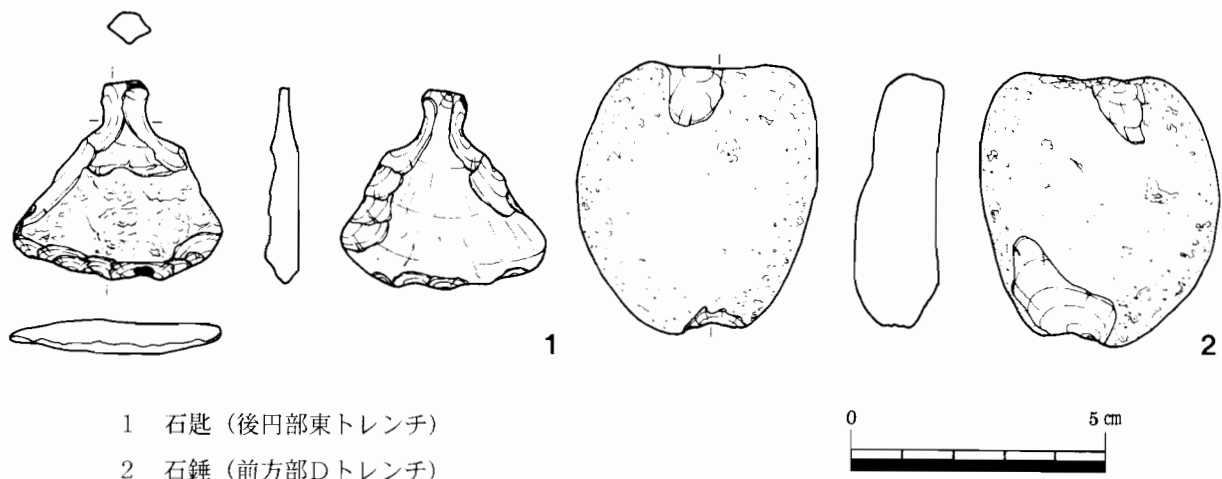
## 3. 他の時代の遺物

### a. 石器 [第9図]

本年度の調査では、石匙1点、剥片3点、石核1点、石錘2点、磨製石斧の体部片1点の計8点が出土している。石匙は後円部東トレンチで出土した。比較的整った三角形をした横型の石匙であり、明瞭なつまみ部を作出している。サヌカイト製で、風化が激しく白色を呈する。長さ38.8 mm、幅41.0 mm、厚さ6.3 mm、重量9.8gを測る。3点の剥片の石材はサヌカイトである。前方部Dトレンチで出土した1点は、長さ21.4 mm、幅39.1 mm、厚さ8.5 mm、重量6.5gを測る。くびれ部北トレンチでは2点が出土した。それぞれ長さ47.6 mm、幅77.6 mm、厚さ17.1 mm、重量46.6gと長さ30.4 mm、幅39.1 mm、厚さ8.0 mm、重量7.9gである。石核は後円部東トレンチで出土した。石材はサヌカイトで、板状の素材を数ヶ所加撃し剥片を剥離している。長さ131.9 mm、幅67.7 mm、厚さ25.3 mm、重量309.5gを測る。2点の石錘は前方部Dトレンチで出土した。ともに扁平な河床礫の長軸両端を打ち欠いた打欠石錘であり、石材として、図化したものは石英安山岩を、もう1点は輝緑岩をそれぞれ使用している。前者は長さ52.4 mm、幅47.8 mm、厚さ18.8 mm、重量63.8g、後者は長さ48.4 mm、幅48.1 mm、厚さ14.2 mm、重量43.3 cmである。磨製石斧の体部片は前方部Dトレンチから出土した。石材は石英安山岩で、薄い緑色を呈する。長さ84.6 mm、幅65.0 mm、厚さ14.3 mm、重量74.9gを測る。

【参考文献】 鈴木道之助 1991『図録・石器入門事典〈縄文〉』柏書房

付記 これらの遺物の石材に関して、岡山大学理学部鈴木茂之氏にご教示いただいた



1 石匙（後円部東トレンチ）  
2 石錘（前方部Dトレンチ）

第9図 石器実測図（S=2/3）

#### b. 土器（古墳時代以降） [第10図]

古墳時代以降の遺物として、古代の土師器、須恵器、中世の土師器、磁器、近世後半以降の陶器、磁器等が出土している。

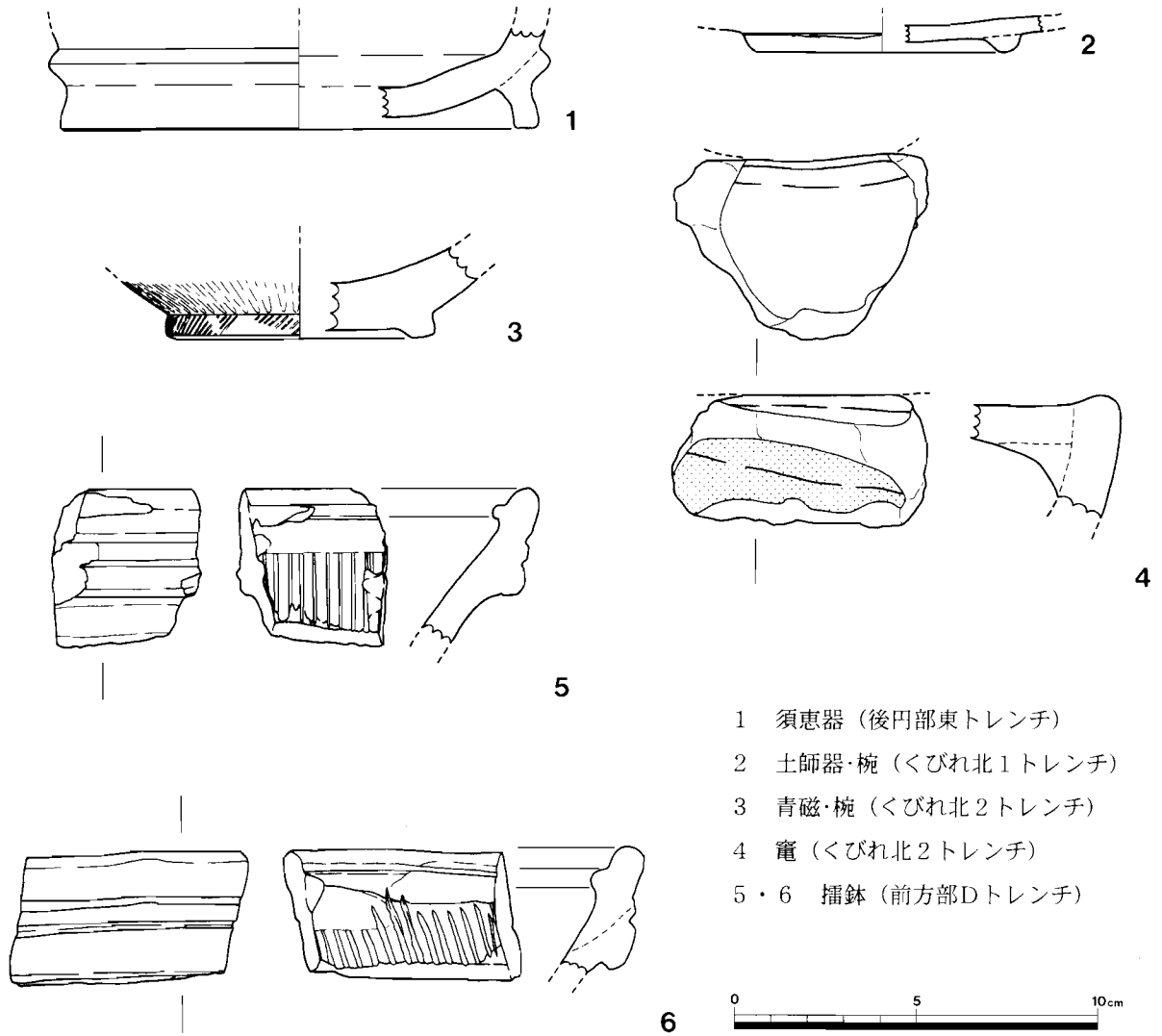
古代の遺物としては、土師器と甕の体部を中心とする須恵器片が多数出土している。1は器種不明の須恵器である。底部から体部にかけて球形を呈する壺類である可能性が考えられる。付高台をもち、底径 13.2cm を測る。灰色を呈し、焼成はやや悪く、胎土は粗い。内外面ともにナデが施されている。これは8世紀代のものと考えられる。

中世の遺物は数点出土している。2は土師器碗の底部であるが摩滅が激しい。付高台をもち、底径 6.9cm を測る。灰白色を呈し、焼成は悪く、胎土は粗い。これは13世紀のものと考えられる。3は青磁碗と考えられる。ケズリ出し高台をもち、底径 6.2cm を測る。灰白色を呈し、焼成は良好で、胎土は精良である。釉は主に体部にかかるが、一部高台にもかかっている。4は土師質の竈である。炊き口の上部にあたり、庇をもつ。にぶい黄橙色を呈し、焼成は悪く、胎土は粗く、内外面にナデが施されている。トーン部には煤が付着している。

近世後半以降の遺物としては陶器、磁器を中心として、各トレンチの上層から多数出土している。5・6は播鉢の口縁部で、5はにぶい赤褐色を呈し、焼成はやや悪く、胎土は粗い。6は灰褐色を呈し、焼成はやや悪く、胎土は粗く、痕跡器官化した注口がみられる。また、5・6ともにつくりは粗雑で、重ね焼き痕が見られず、口縁内面のスリメがナデ消されている。以上のことからいわゆる備前焼の模倣品である関西産播鉢（乗岡 2000）であり、18世紀後半以降のものと考えられる。

【参考文献】乗岡実 2000「近世の備前焼播鉢とその類似品」『岡山市埋蔵文化財調査の概要—1998（平成10年度）—』岡山市教育委員会

付記 これらの遺物に関して、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター山本悦世氏、岡山市デジタルミュージアム乗岡実氏にご教示いただいた



第10図 土器実測図 (S=1/2)

## 結語

今回の調査で、勝負砂古墳は前方後円墳である可能性がきわめて高くなったといえる。そう判断するのは、以下の理由による。

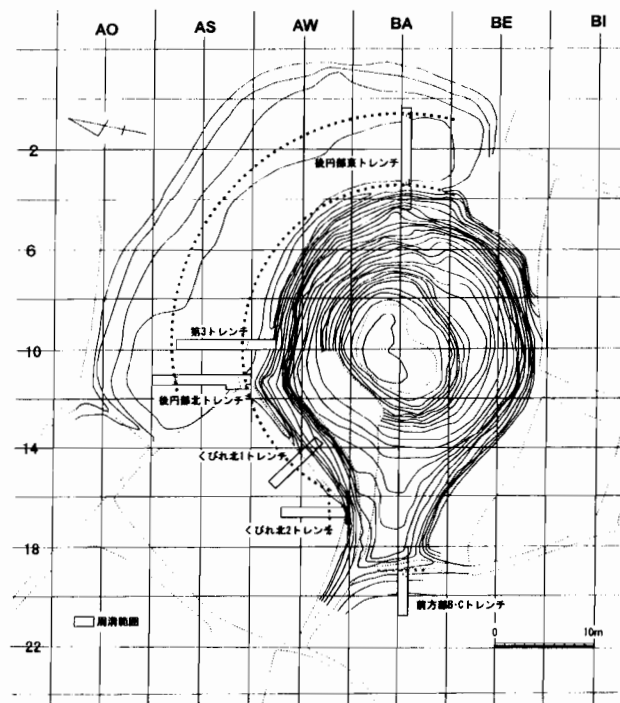
まず、後円部背面（東側）においても、これまでに北側側面で確認されていた溝状遺構に続くと考えられる遺構が見つかり、それが現状において後円部の少なくとも北側をめぐる周溝である可能性が高くなった。くびれ部の調査では、この周溝の続きと考えられる溝が、前方部と目されてきた突出部分に沿って屈曲して西へ続いていく状況が確認された（第 11 図）。このことによって、勝負砂古墳に前方部が存在するのは、まず疑いないとみられる。

さらに、前方部上の調査では、後円部と前方部との接続部分に大きい二次的改変が認められないことから、遺構面として検出した前方部の高さは、築造時のものと極端には変わらないと判断するのが妥当とみられる。長さについては、これまでの前方部前端および前面の調査成果と周辺地形とをみるかぎり、第 4 次調査で確認した現前方部前端直下を南北に横切る溝が、前方部端を画する周溝のもっとも有力な候補と考えられる。そうであるとすれば、勝負砂古墳は、墳丘長約 42m の帆立貝形古墳と判断される。

しかしながら、残された問題も多い。第一は、上記の溝を前方部前端の周溝とした場合、後円部やくびれ部の裾で確認した周溝と、底面のレベルが大きく異なるという点である。前方部前端部分が浅くなる周溝の例は少なくないとはいえ、そのレベル差はいささか極端で、両部分がどのように続くのかは、現段階では不明とするほかない。

第二の問題は、所属年代である。くびれ部の周溝を中心に多くの埴輪片が出土したとはいえ、これが勝負砂古墳にプライマリーに伴うものかどうかは、まだ 100% の確証がないのである。ことに、後円部の側面や背面から埴輪片がほとんど出土しない事実は、くびれ部周溝、前方部前端の溝から相当量、前方部上の流土から発見された少量の埴輪片を、本墳のものとして断定することを躊躇させるものである。したがって、年代の決定については、今後期待される埋葬施設の調査にゆだねられる部分が多いといえよう。また、やや細かいことではあるが、後円部と前方部が接続する墳丘上中軸部分で検出された溝状の落ち込みの性格も、かならずしも明確でない。

以上のような問題は残ったが、今回の調査をもって、勝負砂古墳が、前方部の短小な帆立貝形ではあるが前方後円墳の範疇に入り、いわゆる首長墓として歴史的に位置付けられることが確実にになった点はきわめて大きな成果である。



第 11 図 勝負砂古墳周溝想定図 (S=1/750)



a 前方部Dトレンチ (後円部)



b 前方部Dトレンチ (前方部)



a 前方部Dトレンチ主軸断面1



b 前方部Dトレンチ主軸断面2



c 旧表土を用いた盛土



a くびれ北1トレンチ (墳丘側から)



b くびれ北1トレンチ土層断面1



c くびれ北1トレンチ土層断面2



a くびれ北2トレンチ (周溝側から)



b くびれ北2トレンチ (墳丘側から)



c くびれ北2トレンチ土層断面



a 後円部東トレンチ (周溝側から)



b 後円部東トレンチ (墳丘側から)

---

岡山県倉敷市真備町  
**勝負砂古墳第6次調査**  
概要報告

(整理中の資料につき引用はお控えください)

2006

岡山大学考古学研究室

---